

平成14年度 尾瀬傷病事故統計

(尾瀬山の鼻・尾瀬沼ビジターセンター対応記録から)

財団法人 尾瀬保護財団

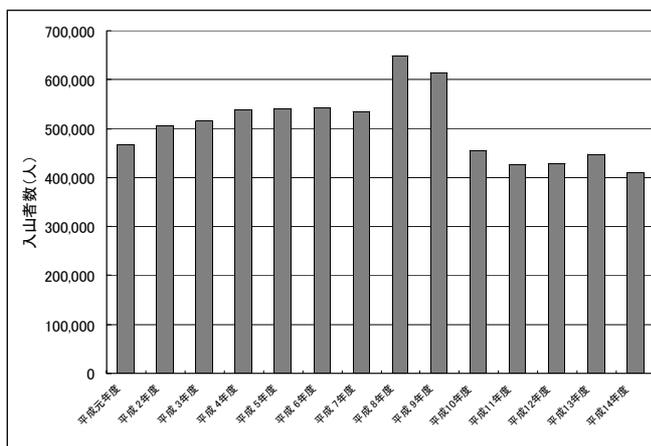
目 次

1	入山者数の状況	1
2	傷病事故の発生状況	1
(1)	年別発生状況	1
(2)	地域別発生状況	1
(3)	原因別発生状況	2
(4)	シーズン別発生状況	3
(5)	月別発生状況	3
(6)	年齢別・男女別発生状況	3
(7)	傷病者の居住地別発生状況	4
(8)	グループ人数別発生状況	4
(9)	傷病事故の通報状況	4
3	救助活動	5
(1)	救助隊出動状況	5
(2)	ヘリコプター活用状況	5

1 入山者数の状況

尾瀬が利用できる季節は5月大型連休後から10月中旬までであるが、同期間で環境省が各登山口に計測するセンサーを設置し、年間の尾瀬入山者数を計測している。この結果によれば、平成元年から平成6年まで徐々に増え続けてきた入山者数は、平成8年の約65万人をピークにして減少傾向に転じ、平成元年度の計測以来、最低の記録となった平成11年度からさらに1.5万人少ない、40万9千人となった。

年度	入山者数 (人)	対前年比 (%)
平成元年	467,090	
平成2年	505,840	108.3
平成3年	515,090	101.8
平成4年	539,790	104.8
平成5年	540,264	100.1
平成6年	542,058	100.3
平成7年	534,196	98.5
平成8年	647,523	121.2
平成9年	614,317	94.9
平成10年	455,409	74.1
平成11年	425,807	93.5
平成12年	428,446	100.6
平成13年	448,041	104.6
平成14年	409,942	91.5



尾瀬の入山者数の推移(環境省のデータから作成)

2 傷病事故の発生状況

(1) 年別発生状況

平成14年度に尾瀬保護財団が管理する尾瀬山の鼻ビジターセンター(群馬県より管理受託)、尾瀬沼ビジターセンター(環境省より管理受託)職員が出動した傷病事故は、51件発生した。

年度	区分	発生件数 (件)	遭難者(人)			
			死亡	行方不明	負傷	計
8年度		16			16	16
9年度		33	2		31	33
10年度		49	4		45	49
11年度		55	1		54	55
12年度		70	2		68	70
13年度		46			46	46
14年度		51	2		49	51

(2) 地域別発生状況

地域別では大江湿原・沼北岸での事故発生率が21.5%と最も高く、ついで尾瀬沼南岸15.7%、尾瀬ヶ原と沼山峠～尾瀬沼11.8%であった。鳩待峠～山ノ鼻が全体の5.9%と例年に比べて少なかった。

区分 地域別	発生件数 (件)	発生 比率	遭 難 者 (人)			
			死亡	行方不明	負傷	計
鳩待峠～山ノ鼻	3	5.9			3	3
尾瀬ヶ原	6	11.8	1		5	6
三条ノ滝	0	0				
大江湿原・沼北岸 (VC周辺を含む)	11	21.5			11	11
尾瀬沼南岸	8	15.7			8	8
沼山峠～尾瀬沼	6	11.8			6	6
大清水～尾瀬沼	0	0				
尾瀬沼その他の地域	4	7.8			4	4
燧裏林道	0	0				
アヤメ平	0	0				
至仏山	3	5.9	1		2	3
燧ヶ岳	5	9.8			5	5
その他	5	9.8			5	5
合 計	51	100.0	2		49	51

(3) 原因別発生状況

傷病事故に至った原因では、依然として木道上での転倒事故が43.1%と最も多かった。例年よりも病気による事故発生率が高く31.4%であり、うち2件は死亡事故であった。

区分 原因別	発生件数 (件)	遭 難 者 (人)				
		死亡	行方不明	負傷	救出	計
木道上の転倒	22			17	5	22
歩道上の転倒	7			7		7
病気	16	2		6	8	16
疲労・低体温	1			1		1
落石	0					
道に迷い	1				1	1
雪崩・雪渓崩落	0					
落雷	0					
徒渉失敗	0					
その他	4			3	1	4
不明	0					
合 計	51	2		34	15	51

(4) シーズン別発生状況

シーズン別では春山、夏山での発生が多く、合わせて9割となった。

区分 シーズン別	発生件数 (件)	遭 難 者 (人)				
		死亡	行方不明	負傷	救出	計
春山(4・5・6月)	25			20	5	25
夏山(7・8月)	21	2		11	8	21
秋山(9・10・11月)	5			2	3	5
合計	51	2		33	16	51

(5) 月別発生状況

月別発生では5～7月の3ヶ月に集中して発生しており、全体の8割を占めている。これは入山者の多さに比例した結果といえる。一方で10、11月は発生件数は少ないものの担架やヘリで救出される事故が目立っている。

区分 原因別	発生件数 (件)	遭 難 者 (人)				
		死亡	行方不明	負傷	救出	計
4月	0					
5月	10			9	1	10
6月	15			11	4	15
7月	14	1		7	6	14
8月	7	1		4	2	7
9月	1			1		1
10月	3			1	2	3
11月	1				1	1
合計	48	2		33	16	51

(6) 年齢別・男女別発生状況

年齢・性別についての記載漏れが多く、すべて不明扱いとした。

区分 年代別	性別不明(人)					比率 (%)
	死亡	行方不明	負傷	救出	計	
10代					0	0
20代					0	
30代					0	
40代					0	0
50代					0	
60代					0	
70代以上					0	
年齢不明	2	0	33	16	51	100.0
合計	2	0	33	16	51	100.0

(7) 傷病者の居住地別発生状況

居住地についての記載漏れが多く、すべて不明扱いとした。

区分 都道府県別	死亡	行方不明	負傷	救出	計
不明	2		33	16	51
合計	2		33	16	51

(8) グループ人数別発生状況

傷病者からの聞き取り内容として記載漏れが多く、データ数が揃わなかったため、割愛した。

(9) 傷病事故の通報状況

通報状況は本人がビジターセンターへ移動しての口頭での通報が最も多く25件(49.0%)であった。同行者からの通報3件の内訳は、携帯電話1件(燧ヶ岳)、子どもサミットで同行していて職員からの無線連絡が1件、口頭1件であった。救助隊の出動も多く23件(45.1%)であった。携帯電話による救助要請は、通話エリアに限られるものの、緊急時には有効な手段であるといえる。

区分 通報別	通 報 者 (件)						比率 (%)
	本人	家族	同行者	他人	山小屋 救助隊	計	
口 頭	25		1		21	47	92.1
携帯電話			1			1	2.0
電 話							
アマチュア無線							
その他無線			1		2	3	5.9
不明							
合計	25		3		23	51	100.0
比率	49.0		5.9		45.1	100.0	

3 救助活動

(1) 傷病者対応時の出動状況

ビジターセンターでの対応が31件（6割弱）であったことから、打撲などの軽微な事故への対応が多かったと言える。

年度 \ 区分	発生件数 (件)	消防	救助隊	ビジター センター	一般	合計
平成8年度	16	2	4	12		18
平成9年度	33	12	20	10		42
平成10年度	49	8	33	16		57
平成11年度	55	9	28	27		64
平成12年度	70	11	18	45		74
平成13年度	46	9	21	22		52
平成14年度	51	9	14	31		54

(2) ヘリコプター活用状況

傷病事故51件のうち6件（11.8%）にヘリコプターを依頼し、6人を搬送した。

11月に発生した豪雪による尾瀬関係者の救助作業は行方不明扱いとした。

年度 \ 区分	依頼件数 (件)	負傷者救助 (人)	病人等救助 (人)	行方不明 (人)	遺体収容 (体)
平成8年度	2	1	1		
平成9年度	5	3	1	1	
平成10年度	3	3			
平成11年度	5	5			
平成12年度	7	5	1	1	
平成13年度	6	6			
平成14年度	6	4	1	1	